「SPAC 秋のシーズン 2025-2026」
アーティスティック・ディレクター
劇作家・石神夏希

SPAC 秋のシーズン 2025-2026 には
〈きょうを生きるあなたとわたしのための演劇〉
というメッセージが込められています。

そこで今回は「**人はなぜ物語るのか**」と「**詩と生活**」（かつて戯曲＝演劇の台本は詩として書かれていました）をテーマに本を選んでみました。

生きるとは、自分の物語をつくること（小川洋子、河合隼雄）

「生きていくうえで難しい現実をどうやって受け入れていくか」「殺したいという気持があっても実際には殺さないために、物語が必要なわけですね。」やさしい語り口がすっと心に染み込んできます。

シグナルとシグナレス（作・宮沢賢治、画・小林敏也）

「岩手毎日新聞」で 11 回に分けて掲載された本作。焼津出身の画家・小林敏也さんの美しい版画と共にどうぞ。個人的には、主人公たちのねがいの叶う場面が演劇みたいだと思っています。

イエスという経験（大貫隆）

世界で最も読まれている本、聖書。イエスの弟子たちはイエスという人物をどのように”経験”し、なぜあのように物語らなければならなかったのか。人は物語を編まずには生きていけないことをひしひしと感じる一冊。

私の船長さん（M. B. ゴフスタイン著 , 谷川俊太郎訳）

ロマンティックで少し切ない恋物語？ 私は、心が自由ならいつだって自分を幸せにできることを思い出させてくれる絵本だと思います。劇場もまた心を自由に羽ばたかせることのできる場所でありたい。

ねこに未来はない（長田弘）

「愛するものを失う痛みを、癒そうとするのでもなく、嘆き続けるのでもなく。悲劇の続き（これぞ喜劇！）を生きる私たちに必要なものは？

茨木のり子の献立帖

「夜、湯豆腐にしてきりぬける。」料理レシピ、日記、台所の間取り図など楽しい一冊。同じく平凡社から出ている『茨木のり子の家』もおすすめ。

人類最古の哲学 カイエ・ソバージュ（1）（中沢新一）

こんにち誰もが知るシンデレラ物語は、世界中に散らばる人類の最も古い神話に繋がっていると中沢さんはいいます。ハッピーエンドに隠された真実とは？

あーちゃんちはパンやさん（ねじめ正一）

人生はドラマだ、とは私は思わないのですが、日常は詩だと思います。ぜひ声に出して読んでみてください。商店街生まれ育ちのねじめさんからほとばしるポエジーが乗り移ってくるようです。

朝のあかり　石垣りんエッセイ集（石垣りん）

「詩は、私の内面のリズムであり、思いの行列であり、生活に対する創意工夫であり、祈りのかたちであり、私の方法による、もうひとつの日常語。」銀行の事務員として働き家族を支えながら、瑞々しい詩を書き続けた石垣さんのまなざし。

きょうの演劇　文庫版

静岡の公共空間とラジオを舞台に展開されたアートプロジェクト『きょうの演劇』（2021～2023 年）戯曲集。静岡市の推進する「まちは劇場」というコンセプトから生まれました。まちや自宅を舞台に、あなたの「きょう」をふわっと自由にするひとときを味わってください。